

# 平成27年度第3回秋田県社会教育委員の会議の要旨

- I 日 時 平成28年1月12日(火) 午後2時～午後4時30分
- II 場 所 県庁第二庁舎3階 31会議室
- III 出席者 委員：稲村委員 大河委員 加藤委員(議長) 小池委員(副議長)  
小玉委員 佐川委員 佐藤委員 新屋敷委員 高橋委員  
松田委員
- 事務局：沢屋生涯学習課長 小玉副主任(兼)班長  
村井社会教育主事 片岡社会教育主事 柏木社会教育主事  
森川社会教育主事 糸田社会教育主事

## IV 会議内容

### 1 開 会

### 2 生涯学習課長あいさつ

### 3 議 事

#### (1) 協 議 【テーマ】これからの社会教育行政の在り方について

視点1 学校教育・家庭教育・社会教育の更なる連携・協働

視点2 多様な主体(他部局、企業、NPO等)との連携

- ・学校では、学力向上が第一だが、ふるさと教育の充実のため、キャリア教育の視点からのふるさと教育を重視し、力を入れている。県で進めている学校支援地域本部が、学校と地域で定着してきている。観光の視点から、観光課や農林部、NPO法人と連携・協働して、首都圏の大きな駅で地域をPRした事例もある。学校に対し、NPO法人や市町村関係部署、運営体、同窓会等に学校の様子を伝えることで、様々な支援が可能となっている。
- ・これからの社会教育の目的は、住民のもっている様々な力を引き出し、学ぶ楽しさや生きる力を向上させ、住民みんなが元気に力強くなっていくことと考える。
- ・同じようなことをいろいろなところでやるのではなく、大事にしなければならないもの、守らないといけないものを、住民みんなが連携して行うことが大切である。垣根を取り払い、地域の実情に応じて組み直していく努力、意識改革が必要である。
- ・小中学校では、先生方や一部の保護者に負担がかかっているのではないかと感じている。公民館や町内会など、それぞれが祭りや運動会などの地域行事を実施するため、参加者の確保に苦勞している。季節の行事を学校や公民館が連携して実施したくても、簡単にはいかないようである。地域の方が授業や部活動などで学校の中に入ることによって、先生がもっと子どもに関わることが可能になると感じる。
- ・一つの目的に向かって共同で作業を進めると、子どもたちにも一緒にやる気持ちが芽生え、少しずつ地域もよくなっていく。子どもがつながりの原点になれるようにすることが大切である。
- ・他県では、秋田県といえば学力、教育のイメージが強い。しかし、都会から若い教育関係の企業家が入っている被災県と比べて、他県との交流や刺激を受ける機会が少ないと感じる。

若年層が公民館行事や地域づくり、NPO法人に関わる機会はあるが、混じり合いの中から切磋琢磨して生まれるものが少ない。

- ・若年層は若い世代の人が主催したものに参加する傾向にある。公共施設が若者向けの事業を実施するときは、場所と資金などを提供して若者に企画を任せたい。ソーシャルネットの活用、宣伝や情報発信など、若者が若者を呼び込むことが可能である。
- ・大学生が大人と話す場合、喫茶店などではなく、無償で、安心して使える公共の場が適している。若者と公的機関は親和性があると感じている。
- ・中高生が明るい未来を語れる機会があればいいと感じる。不安なニュースや言葉を耳にしている世代であるが、地域づくりや地域興しに関わっているNPO法人がふるさと教育やキャリア教育の視点から、中高生に明るい未来を考えるきっかけを与えることができる。これも社会教育の分野である。
- ・交流体験で地元の子もたちが頼られる存在となり、一回りも二回りも成長できた。お互いの良さを認め合い、それをお互いの地域で生かすことができる。
- ・学校支援地域本部がある地域では、学校での地域に根ざした文化体験をとおして、地元を学ぶ機会としている。また、祖父母世代等の多年代との交流という点でも効果があり、全体がWIN-WINの関係となっている。これまで単なる公民館事業でやっていたことも、学校支援地域本部の活動として実施していくことで、経費の削減にもつながっている。地域に根ざした文化を生かしながら、もっと学校と地域を結びつけ、連携を図りたい。
- ・学校支援地域本部がある学校であっても、地域によって文化も考え方も違うため、温度差は出てくる。そこで、地域の枠を越えて活躍できる、統括コーディネーターの配置を提案していきたい。地域だけの体験を他の地域でも体験できるようにして、市内全体の本部の推進につなげたい。
- ・学校支援地域本部における地域のバックアップ体制はかなり整ってきている。子どもたちには、ふるさとの良さを知る機会として、防災キャンプや交流活動など、地域の高齢者と接する機会を設定したい。子どもたちのために地域の祖父母世代が活躍できる機会を作るとは、社会教育行政の重要な役割の一つだと思う。また、地域の教育力をアップするために、地元の人が自分で動けるようなNPO団体があればより効果的に進むと感じる。
- ・北秋田市でスタートした「Gちゃんサミット」は地域振興局と連携して3回目を迎え、北秋田市だけでなく、上小阿仁村や大館市とも課題を共有し、高齢者による課題解決型事業として実施している。これからシニアとなる世代も加わり、さらに新たな展開につながる可能性がある。また、次は国と連携して、全国バージョンの「Gちゃんサミット」として、北秋田から全国に発信し、様々な世代や地域のつながりをつくっていきたい。
- ・新たな公民館のスタイルとして、新しい形のコミュニケーションスペース、地域の教育力アップの拠点、子どもたちを主役にした地域の元気を創出などをコンセプトとしたい。学校の発表会等に地域の高齢者がどんどん入り込み、高校も含めた地域の学校を核とした人材づくりを実施したい。
- ・地域に子どもが少なくなってきたが、やらせたいことは多くなり、子どもの奪い合いと感じることもある。しかし、子どもにとっては、いろいろなことに触れ、そこから自分で選んでいくのは、生きる力につながる大切なことだと感じている。
- ・公民館や町内会は学校と関わりにくいところもあるが、地域で活動している生涯学習団体が子どもと関わることはとても重要である。子どもたちが活動する場の設定により、子どもの頑張りが認められ、成長ややる気につながっている。
- ・ふるさとの良さを感じる取組として、地域の協力を得ながら実施する年中行事がある。その際、地域の高齢者から「ふるさとの良さを忘れないでね」と言われると、子どもたちの心に浸みている気がする。

- ・小さな町村内だけでは、村内だけでふるさと教育やキャリア教育に関わってくれる人を探すのは大変だが、町村内だけにこだわらず、いろいろな地域の人を借りて、広いところに出て行くことも必要である。
- ・学校教育と社会教育の連携、協働の第一段階として、お互い何をしているか知ることが大切である。学校は子どもが社会教育の場で、家庭は子どもが外で何をしてきたか、会話がそこから始まる。学校と家庭、施設が連絡し合えるコミュニケーションツールのようなものがあればいいと思う。例えば、お薬手帳のイメージで、学校や少年自然の家、図書館から活動したことやそのときの様子などをメッセージとして記入してもらい、それをお互いに見て知り合えるようなものがあればいいと思う。人がどう評価してくれるか情報を共有することによって、子どもを認める機会が多くなる。そういう支援ができないかと考える。
- ・小中学校が1校ずつの小さな町村では、放課後や学校支援の呼びかけ、家庭教育の支援、土曜日の活動など、公民館が一手に引き受けて、統括コーディネーターのような役割を果たしている。こうした取組をNPO法人が引き継いでいく段階にあると感じる。町村内にはいろいろなことができる人材が存在しているのでも、地域みんなで子どもを育てるという目的をもった人が集まってNPO法人を結成できないかと思っている。
- ・団体の代表者が集まる様々な会議が開催されているが、もっと実践的な意見を出し合える会議ができればと考えている。ここの地域で子育てしたいと若い世代に伝えられる地域にしたい。
- ・土曜日については、学校で地域の人と関わりながら、スポーツや料理、絵を描くなど、楽しいことができる教育の場として活用したい。PTAや祖父母などがボランティアとして参加できるように、学校を核とした人材づくりの仕組みをつくり、さらには中高生、卒業生も関わられるようにしたい。
- ・学校内だけで完結しないで、周りをもっとうまく融合させられればと感じるが、実状では、考え方や価値観、縄張りなどが気になっているので、NPO的なものが機能しやすいと感じる。
- ・外から見ることで良さを知り、徐々に認知されてくることもあるので、いろんなところと連携し、外部からの声を聞くことも大事である。
- ・NPO法人の活動は大事である。公民館のような公の場所でNPO法人が安心して活動できることを積極的に発信してほしい。
- ・提案した人がすべてやらなければならないという発想もあるので、周りのできる人ができるところで協力する仕組みがあると、具体的な活動をする上で安心感がある。
- ・活動の良さを見つけたり、やったことが評価されたりすると、意欲が高まる。また、参加者が主催者となって新しい活動を展開することもできることを伝えながら、いろいろな人の参加を期待したい。
- ・外部との交流ということでは、高校生や大学生が主体となって、県を越えて東北全体の学生や若者が交流する場を秋田の主催でやってみてはどうか。秋田は他県に比べて、お祭りや無形民俗文化財が圧倒的に多いので、他地域と比較することでこれまでと異なる視点をもつことができ、それは自分の地域を知り、ふるさと教育につながるものと考えている。
- ・年中行事や方言を地域の文化として伝承することは、社会教育が担っていくべきものである。
- ・PTAの大会で、地域の指導者から教わった踊りや笛、太鼓、歌（甚句）などを小中高校生が発表した。いろいろな地域の盆踊り等が披露され、とてもよい機会と感じた。地域の文化の継承に学校が積極的に関わることはとてもいいことだと思うので、継続してほしい。
- ・読み聞かせボランティアが方言のカルタを作って子どもたちにやらせた。分からない方言について子どもと大人が話し合う機会になった。グループの活動をとおして、他の地域にも広がり、子どもと大人と一緒に楽しみながら方言を伝承する機会になっている。

- ・文化の継承として「田舎で命をいただく」体験活動を実施しているが、田舎でないとできない事業である。初めはためらっている子どももいるが、ほめられると子どもは変わっていく。子どもの成長を見る大人も共有でき和む。継承していくことは、子どもにとって大切であると同時に、我々大人にとっても大切なことである。
- ・体験活動の実行委員の中に、都会から移住してきた若い世代の男性がいる。今やらないと5年先はないという思いがあり、彼を中心に事業が展開している。2年前から大人向けに実施していたことを、文科省の事業を活用して子ども向けとして実施している。
- ・地域でやりたいことを行政がもっとキャッチするべきである。教育委員会だけでなく、産業部や福祉部などと連携すると、さらに大きい取組にすることが可能である。情報を集めながら、ゆくゆくは若者を中心にして、多年代からなるNPO法人を組織できないかと考えている。それぞれがやりやすいところに入り込んでいけるように支援することが行政の担う役割である。また、やることによって新しい情報も得られる。
- ・地域を元気にするのは若者、馬鹿者、よそ者というが、それを受け入れ、一緒に応援してける組織や環境が大切である。
- ・よそ者の大学生が入りやすい環境をどう作るか考えていきたい。環境づくりや土壌づくりは耕さないと花も咲かない。そうした動きを、みんなで把握して共有しないと前に進まない。
- ・子どもも親もスポ少や部活、塾通いなど、忙しい中時間のやりくりをしている。社会教育は大切だが、目に見える点数や成績にとらわれてしまい、一番大切な本物の体験ができない状況もある。学校でやるのが大切だが、学校も忙しいので、そこにジレンマがある。
- ・学校は学力、体力、心をバランス良く伸ばすところである。心や体を育てないと学力は身につかないと考える。
- ・学校にとっては、学校教育と社会教育のどちらも大切で、両方やらないといけない。校長の考えもあるが、部活に生き甲斐をもっている先生や子ども、親にも心を育てるよりとにかく勝たせたい、などいろいろな価値観があり、どれを優先していくかのかが難しい。
- ・学校行事と地域行事のコラボレーションはどこの小学校でもやっているが、先に立つ人がしつかりしないと先生の負担が増えるだけになる懸念がある。
- ・地域では、若者の方がたくましくなっている場合がある。年配の方は、行政がすべてやってくれるのに慣れているが、若者の方が発信や企画に優れていて、かなりの差がある。
- ・学校から何かやりたいという場合は教育委員会を通さずにやり、学校に何かをやってほしいという時は必ず教育委員会を通すようにしている。地域の方を学校に呼び込もうとする場合、いろいろな人がいて、その整理が必要である。
- ・行政の守備範囲が広がっても職員は少なくなっている。しっかりとした若者や力のある年配の方を活用し、子どもの教育に生かしていくことが行政の仕事である。知識・技能を身に付けるだけでなく、学び方、つながり方をどう教えていくかが大切である。
- ・学力も必要だが、高校生が秋田に残る、県外に行っても戻ってくるようにすることが必要である。大人と子どもと一緒に活動することで、ふるさと教育や文化の継承、秋田に戻ってくる力になると考えている。そうした力を育てていくのは地域であり、子どもにそれを見つけさせ、感じさせることが必要である。
- ・学校の力を借りないと地域は元気にならない。学校も大変だが、今を逃すと地域に未来がないという考えを持ちたい。
- ・アンケートでは、自尊感情や郷土愛の高まり、ふるさとに戻りたいという項目は数字が上がっている。受験の面接練習をすると、ふるさとの良さを話せる。
- ・地域の大人と関わっている子どもは、しっかり受け答えできるという。大人と一緒にボランティア活動など、子どもにインパクトのある体験をさせたい。
- ・人と実際に関わらないと力がつかない。現実には高校進学や大学進学などがあるが、本当に大

切なのは、今の子どもたちが年配になってから地域を思い出すことである。スマホで見られる情報はすぐ忘れてしまうが、現場に行って直接体験し、直接会話をしたことは忘れない。

- ・子どもに地域で愛されているという思いがあれば、何かの時に必ず思い出してくれると思う。地域をフィールドにした体験は五感で覚えている。
- ・余所に行った時に、自分の地域で誇れる文化を自慢できるようにしたい。イベントとのタイアップを図り、体験をとおしたふるさと教育を進めたい。
- ・社会教育は人に依存する傾向にあるが、受け止められる組織づくりが必要である。その中に、学校教育と社会教育の両方に精通した人材として統括コーディネーターの存在が重要になってくる。
- ・大学も含め、地域の学校では地域に根ざした活動を実施しているが、地域に卒業後の雇用がない。産業の活性化がないと、学生も地元に戻りたい気持ちはあっても戻れない。社会全体の問題として考えていかないと戻れない部分もある。
- ・社会教育という広い守備範囲の中で、キーパーソンは若者、それをバックアップする行政の体制を考えたい。

## (2) その他（社会教育団体補助金について）

### 4 その他（今後の予定について）

### 5 閉 会（沢屋生涯学習課長あいさつ）